



宇宙の傭兵たち *The Mercenary* (1977) ジェリー・パーネル (石田善彦訳) 東京創元社 (文庫) (9/4刊・¥400)

アメリカとソビエトから構成される世界政府、〈連合国家〉の、政治的な混乱が続いていた。〈連合国家〉の解体を叫ぶ、民族主義者の台頭する状況で、軍の予算は削減され、政治の腐敗に批判的だったファルケンバーグは、その連隊ごと軍を追放される。彼らは、軍の撤退と共に、軍事的に空白化した植民星で、傭兵として使われることになる。しかし、ファルケンバーグには、隠された任務があった……。

ジェリー・パーネルの作品が、なぜ一部の読者に反感を抱かせるか、(遅まきながら)判ったような気がする。なにしろ、全然政治やイデオロギーと関係のない、軽い冒険小説であるはずなのに、そんな臭いが強く漂うのだ。本書は、軍隊ハード・ボイルドとでも言える内容で、主人公が非情に殺戮を命じたりする。しかし、そこに政治的正当性を臭わせるところが、何といってもイヤらしい。主人公の苦惱なんて、この類の話では、どうでもいいはずなのだ。二つあるエピソードの最後に、ハッピーエンドがつくところも、ちょっとバランスを欠いている。中途半端さが、気になる。